本誌 **50**: 105-114 (1975) に益山樹生氏がカラクサシダの配偶体についての立派な観察結果を報告している。益山氏は特有の毛以外の諸形質はすべて胞子体の岩上生という生態に関連しているもので，系統的価値は認められないといっているが，20年以上配偶体を扱っている私には大いに異論がある。すなわち益山氏発表の配偶体の形態からみると，カラクサシダはウラボシ科特に *Christiopteris* (東南アジア方面に数種知られた中形のシダ) と類縁が深い。周皮を持たない両面体の胞子，発芽の際の様子，初期の仮根が褐色を帯びること，前葉体の発達様式，多年生で分枝したリボン型の成熟前葉体などはすべて，イノモトソウ科・イワガネソウ科・チャセンシダ科などには見られないことで，ウラボシ科の方とよく一致する。なお染色体や幼葉の性質の研究によって類縁はさらに確立されるであろう。

○ヤマアイの染色性について (渡辺清彦) Kiyohiko WATANABE: Possibility of *Mercurialis leiocarpa* as blue dye in ancient Japan

最近辻村喜一氏が「熊野に自生する山あいを用いた小忌 (おみ) の青摺について」と云う，20頁ばかりの小冊子を送って下さった。それは学術論文と云う形のものではないが，ヤマアイについての我々の考を一変させる実験である。ヤマアイがインジゴを含まぬ事は，本誌44巻314頁に久内清孝氏も書いて居られるし，又昭和46年発行の三木産業KKの「阿波藍譜・精藍事業篇」503—512頁に，戸田隆幸，後藤捷一，安村二郎三氏合著の「内地産山藍は青藍分を含まない-分光光電光度計による山藍および蓼藍中のインジゴの分析」と云う報文がある。ヤマアイの葉をすりつぶしてその汁を濾紙に滴下すると，葉緑素による色斑の周囲に無色の液のシミが拡がり，暫くしてそれが青色に変る事は周知の事である。またヤマアイの葉緑素を含まぬ白色の地下茎を搾って無色の汁を滴下すると，それも青色に変る事も容易に実験出来る。然しこれは多くは数日のうちに赤変し，且つ水を入れるとこの色は溶け去るので染色性はない。これが欧州の *Mercurialis annua* で Hermidin と呼ばれるものと推定されるが，辻村氏によるとこの青変は日光にさらすと著しく進み，数日日光に当てたヤマアイの乾固体を粉末にして，小量の水で (弱アルカリが良いと云う) 浸出すると青色液が出来，これで布を染めて銅塩 (硫酸銅等) で媒染するとそのまま色が定着し，水で洗っても脱色しない事を報告している。そして氏はこれが古代の山アイの摺染であろうと論じている。我々がヤマアイを扱って特に気づく事は特有の悪臭のある事である。ヤマアイにはインジゴは無いが，アイのインジゴ，クサギのトリコトミン，貝紫のディブロムインジゴ等，インジゴイドが皆悪臭のある事と何等かの関係もありそうに思われる。辻村氏は薬品系統の方であるが，今更第一線に出てヤマアイの化学成分を追及される御意志もない様に思われるので，何方かこの問題を追及して下さる方があればと，紹介する。なお氏は和歌山県田辺市湊三栖口 1580-4，〒646 に住んで居られる。

(市川市　和洋女子大学)